小田原教育

第126号

平成２９年３月１１日

イチリンソウ

葉のうえに可憐な一輪の花を咲かせます。
かつてはどこの雑木林にも見られましたが、今ではまれにしか見られません。

目　次

巻頭言 …… 2
「『十年は一昔』というけれど…」　足柄小学校　校長　松野　司

1　小さなこころみ …… 3
「児童生徒の読書に関する研究」　白山中学校　教諭　土井　智香子

2　学びの架け橋 …… 4
「全国学力・学習状況調査の結果を活用した学力向上の研究」
新玉小学校　教諭　神谷　啓之

3　ある教室から …… 5
「遊びが学びとなるために」　教育指導課　指導主事　山本　礼子

4　研究所だより
① 平成２８年度全国学力学習状況調査の結果概要について …… 6
② パワーアップ研修 …… 7
③ 自然観察会 …… 8
④ 新しい本の紹介 …… 8

「十年は一昔」というけれど・・・

足柄小学校　校長
松野　司

十数年前、研究所で「児童・生徒の意識調査」を行っていた時、この小田原教育に寄稿したことがあります。少し長くなるのですが、一部を紹介します。

『テレビ放送が始まって今年で５０年たつのだそうだ。私はテレビばかり見ている「こども」だった。「アトム」や「鉄人」に至ってはまさにヒーローだった。　＜中略＞このような技術革新の現在に身を置いていると、今のこの状況がずっと前から続いていた錯覚に陥る。少なくとも「おとな」である私たちは過去という時間の連続の中で今が成り立っていることを経験から知っているのに、意識上の知覚麻痺が起こっているのだ。
＜中略＞　21 世紀といえば明るい未来と相場は決まっていた。アトムだって 2003 年の未来からやってきたのだ。私たちは過去から未来へ進みつつあると漠然と考えている。過去を背にし、前方の未来へ眼を向けながら、昨日、今日、明日を生きているとのイメージを抱いている。もしそうであるなら、もっと的確に未来を見据えることができているだろう。しかし、実際には、私たちはほとんど先行きを見通せていない。今のこどもと１０年後、２０年後のこどもの意識とを比較する中で、目に見える過去を未来への指針とできるとの思いから、研究所では児童・生徒の生活と意識調査に着手している。』

漠然とこの十年を過ごしてきたわけではないのですが、改めて振り返ってみると、知覚麻痺を起こしている部分が結構あります。十年前と全く同じ感覚ではあり得ないのですが、なるほどなぁ、今もそんなに変わってないなと。でも、目に見えない変化はきっとあるのでしょうね。いや、本当は見えているのだけれど、見ていないのかも知れません。意識化がなされていないために、そこに気付いていないだけなのですね。

私たちは進化したのだろうか？　教職という専門性を盾に様々な失敗をし、経験の中から学んできたはずなのに。現在に向かってくるときの過去の意味は、進化していなければならないと思っているのですが、十数年前の文章を読みながら失敗を生かしてきたのか？経験値（知）を十分活用してきたのか？　前進することはできているのか？　それどころか、未来への後ずさりをしているのではないか？　と頭を抱えています。

私たちの最大の目的は、知識の集結ではなく、行動することです。行動するというのは、生き方そのものでもあります。知識、知恵、勇気、そして行動は大きな力を生みます。目標を達成させ更に次へと前進する力を生むのです。言葉は悪いですが、その時に経験値（知）は最大の武器になります。経験値（知）の少ない方は、自分の思ったことを素直に周りに話せばいいのです。必ずヒントは見つかりますから。

すべてが完璧でなくても、必要なことがわかっていて、やりたいことができるなら、それをまずやってみることが大事なのです。一つでもソリューションがあれば、実行してみるべきです。是非、そういう意識と行動力を持って、子供たちに示していきましょうよ。「アトム」や「鉄人」を知っている、意識が時代の変化に追いつかなくなっている私と同世代の方はもちろん、若い皆さんも知覚麻痺を起こさないよう、その原点は「意識化」と「気付き」、そして「行動」であることを忘れないようにしたいものです。

児童生徒の読書に関する研究

共同研究「読書」研究員
土井　智香子（白山中学校）　関　亜紀子（足柄小学校）
海老原　将　（橘中学校）　小川　浩二（千代小学校）
藤本　明美（東富水小学校）

1　はじめに

読書は、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、人生をより深く生きる力を身に付けていくために欠くことのできないものです。しかし学年が上がるにつれて本を読まない児童生徒の割合は高くなり、読書指導の必要性が明らかになってきています。

本研究では、「読書のおもしろさがわかる、すすんで読書に親しむ」指導のあり方を探り、児童生徒一人一人の読書意欲の向上を図ることを研究の柱としました。

2　研究内容

一つめの柱：児童生徒がより多くの図書に触れる手立て

本研究では、教科書などの教材文を使って文章の読み方を学ばせ、その読み方を、教材文の著者による別の図書や、教材文で描かれた内容に近いストーリーの図書の読書に生かす授業実践に取り組みました。教科書教材の読み方をその後の読書につなげることは、児童生徒の読書の幅を広げ、読書活動を豊かなものにするのに有効に働くと思われます。

二つめの柱：学校図書館司書の活用

研究員の授業実践では学校図書館司書の協力を得て取り組んだことで多くの成果がありました。例えば、授業で使用する図書の選定では、児童生徒の実態や学年を考慮し、学習活動にふさわしい図書を選んでもらうことができました。また、授業の中で児童生徒が自分の目的に合った図書をさがすときには、専門的な視点から効果的なアドバイスをしていただくことができました。

三つめの柱：環境の整備

本研究では朝の読書タイムや休み時間などに、図書をすぐに取り出せるようなブックバッグの活用をすすめました。これは、児童生徒がいつでも本を読むことができ、読書をより身近なものとさせるのに有効だと思われます。また、学校図書館の効果的な活用という点にも着目しました。学校図書館がもつ「読書センター・学習情報センター」としての機能を授業の中でどう生かすか、児童生徒の実態や学習活動のねらいなどを踏まえながら考えて活用することの大切さがあると思われます。

3　結び

これらの授業実践や研究から、児童生徒は機会さえあれば読書をするし、また、読み方さえ分かれば、すすんで読書の幅を広げて楽しさや面白さをつかもうとすることが分かってきました。この研究を通して児童生徒の読書意欲の向上のためにできる手立てを、更に追究していきたいと思います。

全国学力・学習状況調査の結果を活用した学力向上の研究

新玉小学校　教諭
神　谷　啓　之

１　はじめに

今年度も、４月に全国学力・学習状況調査（以下、全国学調と省略）が行われ、９月にはその結果が各校に配布された。全国学調の本市の結果より分析された課題を受け､学力向上につながる取り組みを研究し、その成果を各学校の実践に役立てることが本研究の目的である。

２　小田原市の状況

全国の結果との比較から、主に次のような傾向が伺えた。

・国語、算数・数学ともに平均正答率が低く、無解答率が高い。
・「漢字の読み書きや計算に関する設問」に課題がある。
・全国学調の分析結果を教育活動の改善に活用した割合が低い。
・家庭学習にかける時間が少なく、ゲームやスマートフォンに費やす時間が多い。

３　研究内容

小田原市の状況を踏まえ、部会を三つに分けて研究を深めることとした。

（１）基礎・基本部会（基礎的・基本的な学力の向上に関する取組）

今年度は､「計算」に絞って研究を行った。早川小学校の基礎学力を定着させるための取組（週１回１５分程度。１～３週目は同じプリント、４週目はプリントの数値を替えて行う。）を参考に、研究員が自分の学級において実践した。その結果、４週目は１週目よりも正答率が上がったことから、この取組が計算力の向上に効果的であることが分かった。また、毎週の結果を集計することで、教師が個人や学級のつまずきの傾向を把握することができ、指導に活かすことができた。

（２）授業改善部会（思考力を伸ばす授業改善に関する取組）

昨年度までの共同研究（全国学調の活用に関する研究）の成果を活かし、まずは、研究員が自分の学級における「学級分析シート」を作成した。全国学調の結果を分析することは、児童生徒の学力を客観的にとらえることにつながり、指導の方針や手立てに一貫性をもたせることができ、授業改善に役立つことがわかった。また、教科担任制である中学校での学級分析シートの作成や、追跡調査のための質問紙などの手立てについても、検討を行った。

（３）家庭生活部会（家庭学習等の充実に関する取組）

テレビやゲーム、スマートフォン等に費やす時間の長さが、家庭学習の時間に影響を与えているのではないかと考えた。そのため、まずは自分の生活リズムを客観視することが大切であると考え､「生活リズムチェックシート」を作成し、各研究員の学校で実施した。児童・生徒自身が自らの生活を分析することで日頃の生活習慣を振り返り、改善できるように取り組んだ。また、保護者のコメント欄を設けることで、家庭でも生活習慣について話題にしてもらう機会になった。

４　おわりに

全国学調は、新聞などでは都道府県ごとの平均正答率だけが大きく報道されがちである。しかし、本研究では、質問紙調査も含め結果を様々な角度から分析し、活用していくことが大切であると考えている。小田原市の児童生徒の確かな学力の向上へとつながるよう、来年度はさらに具体的に研究を深めていきたい。

ある教室から

遊びが学びとなるために

教育指導課　指導主事
山　本　礼　子

「おはようございます。」登園すると、子供たちは思い思いの遊びを始めます。
転がるおもちゃを作っていた子(C)と先生(T)。T「テープ貸してください。」C「はい、いいよ。」T「ありがとう。」園のみんなで使うテープが２人のちょうど真ん中ぐらいの位置にあったのですが、「貸してください。」とわざわざ声をかけた先生。相手を尊重する気持ちが伝わってきました。こういったやりとりを繰り返す中で「ありがとう。」「いいよ。」が自然に言える子供たちが育っていくのだろうなと感じました。

おもちゃコーナーで「ぱっちんがえる」を発見した子。ビヨーンと高く跳ぶことが楽しくて夢中で遊んでいます。C「これ作りたいなあ。」T「何でできてるかな？」C「うーんと、牛乳パックとね、輪ゴム。」T「じゃあ、牛乳パックと輪ゴムをここに持ってこようか。」必要なものをすぐに与えるのではなく、まず考えさせ、実現に向けて一緒に取り組んでいこうとする先生の姿がありました。自分で考えて行動しようとする気持ちをもつための基盤となっていきます。

おしゃれなエプロンを作っていた子供たち。フリルやポケットを付け、いよいよ試着です。でも後ろでひもを結ぶことは難しく「先生、これ結んでください。」とお願いをしました。すると、先生はその子の正面に立ちました。「先生を見ながら自分でやってみよう。」「こうやって、ひもは前に持ってくるでしょ。」「前なら結べるね。」「それから後ろにくるっと回してできあがり。」今度はその子の後ろに移動し、ほどけそうになったひもをそっと結び直してあげながら「ばっちりだね。」とにっこり。先生が鏡がわりとなり、一緒にやってみせることで、その子はできることが一つ増えました。エプロンの完成はもちろん、ひもが結べたことも嬉しかったことでしょう。

探検隊になりきっていた子供たち。リュック、腕時計、懐中電灯といった手作りの探検グッズで身支度を整え、大きな段ボール箱の中をごそごそしています。新聞紙やビニールで作った岩の塊と一緒に入っている恐竜の骨をハンマーで掘り出していたのです。このわくわくする活動は、部屋の隅にある椅子の上に箱を置いて繰り広げられていました。そこへ先生が近づき、「これは恐竜の骨だよね。じゃあ、あっちの山へ隠して探した方が楽しいよ。」と声をかけました。「よし、山だ！」と子供たちは窓際へ。低いとはいえ並べた椅子の上では不安定であり、広いところで思いきり遊ばせたいと判断されたのでしょう。「狭いから。」「邪魔になっちゃうから。」ではなく「あっちの山がいいよ。」と子供たちと同じ探検隊の世界の中に浸ってのアドバイス。探検活動は途切れることなく続きました。

幼稚園教育の果たす役割は生活や遊びなどの豊かな体験を通して、人とかかわる力、思考力、感性や表現する力を育み、小学校以降の学校教育のねらいである「生きる力」の育成へとつなげていくことにあります。これは生涯にわたる人格形成の基礎を培う上で重要なことです。教師には、幼児が遊びの中で必要な経験を得ていくことができるよう、教師自身が人的環境として働くとともに、幼児をとりまく環境を適切なものにしていくという役割があります。「遊び」が「学び」となるために、教師の様々な配慮と援助が必要不可欠です。幼稚園では、幼児が実現したいと思っていることにつながる援助、ものや人とのかかわりをより深めるための援助が、日々穏やかに行われています。子供たちの目の輝きや先生方が一人一人に寄り添う姿から、生きていくための基礎が着実に培われていることを感じる幼稚園での時間でした。

研究所だより⑦

平成２８年度全国学力・学習状況調査の結果概要について

教育指導課　指導主事
綾　部　敏　信

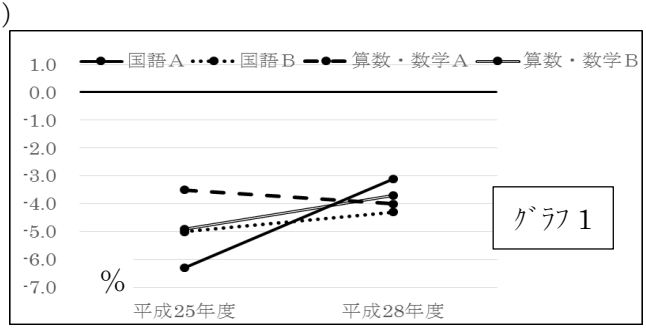
１　市としての基本的な考え

本調査で測定できるのは「学力の特定の一部分」であると認識しているが、調査問題は、学習指導要領の目標･内容等に基づいて作成されたものであり、その結果は、児童生徒の学力の重要な側面を示す客観的な資料である。

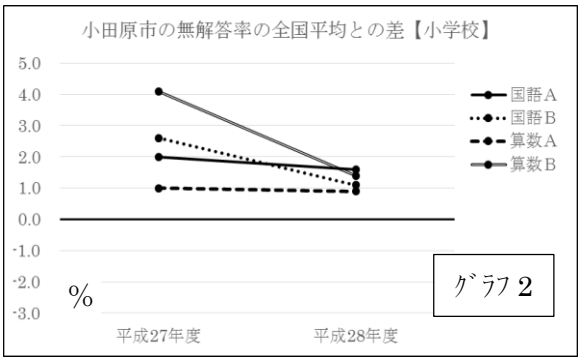
２　教科に関する調査結果

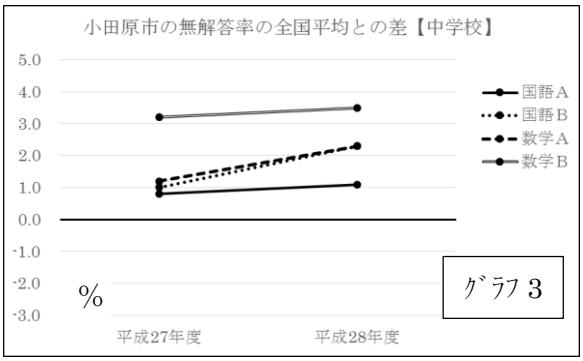
・本市の平均正答率は、小中学校ともに全国平均を下回っているが、いずれも±５％の範囲内にあり、全国と大きな差ではない。(※平均正答率±５％の範囲内は「大きな差ではない」という文部科学省の見解より)

・平成２５年度（小学校第６学年）の結果と平成２８年度（中学校第３学年）の結果を比較すると、全国平均との差が全般的に小さくなっており、学力向上が図られている。【グラフ１】



・重点目標としていた無解答率は、昨年度と比較し小学校は減少しており、中学校においては微増であった。特に中学校の数学Ｂに課題が見られる。【グラフ２・３】





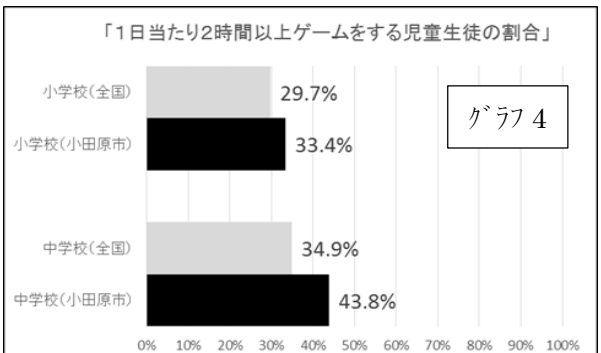
３　質問紙に関する調査結果

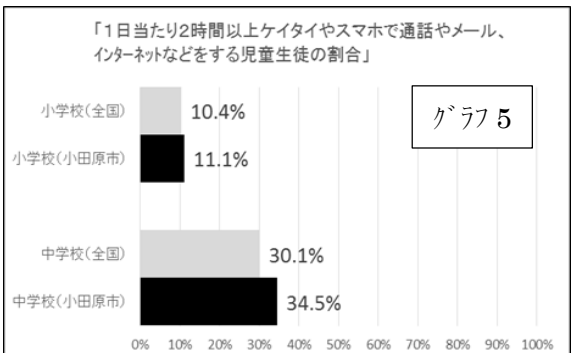
・「最後まで解答を書こうと努力した」割合が、小中学校ともに全国平均を下回っていることから、児童生徒の本調査に対する意欲の低さが伺える。

・小学校において、「調査時間が足りない」と回答している割合が全国平均より高く、時間が足りないことで、力を発揮できていない児童がいることが伺える。

・家庭学習時間は、小学校で全国平均を下回り、中学校ではほぼ全国並みである。

・ゲームやスマートフォンにかける時間は、小学校、中学校とも全国を上回っている。小田原市の中学生の半分弱が１日に２時間以上ゲームをしていることは、大きな課題である。【グラフ４・５】





パワーアップ研修

研究所だより②

教育研究所　研修相談員
瀧　本　朝　光
押　切　千　尋

意欲的な中堅教師、または若い教師がパワーアップすることをねらいとする研修です。

今年度も教育研究所長と２名の研修相談員が研修にあたり、小学校１８名、中学校７名、計２５名の研修者が１年間の研修を終えました。

平成１９年度から始まった本研修も今年度で、１０年目を迎えました。この間に研修を受けたのは中学校５０名、小学校１２１名で、計１７１名となりました。研修を終了した先生方は、それぞれにパワーアップされています。神奈川県や小田原市の指導主事、小田原市の共同研究やプロジェクト研究の研究員、校内での研究主任等、小田原市の範囲を超えて活躍されています。日々忙しい先生方ですが、１年間自主的に取り組む研修を通して、指導力・意欲の向上が進んでいると考えています。

また、本研修は、神奈川県内においても進んだ取り組みとして、平成２９年１月には、全県から集まった教育研究所指導主事を対象にした研修会において紹介しました。

この研修の特色は、自ら研修テーマを設定し、１年間同じ担当者が勤務校を訪れ授業研究を中心に行うことが挙げられます。また、全体会では、研修を魅力あるものにしたいという思いを持ち、互いに学び合う姿勢が持てるように取り組んでいます。

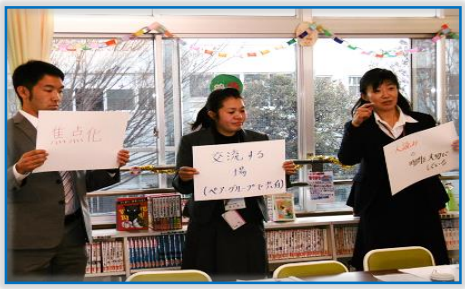
研修者の言葉を紹介します。

『やっぱり授業を見てもらうことが、一番成長につながると改めて感じました。』

『「学ぶことは変わること」子供が変わることに携われることを大切に自分自身も変わっていきたいと思います。』

『「座席表の活用で交流の場を作る」をやってみます。子供たち自身が自然と関われる、思わず関わりたくなるような場の設定を作っていきます。』

勤務校における研修風景（授業研究）



代表者による全体会風景（研究協議）

今後も、「大変だったけれど、受けて良かった。」と言っていただける研修にしていきたいと考えています。来年度も、意欲のある先生方と出会えることを楽しみにしています。

研究所だより

自 然 観 察 会

「あ、カニだ！」「アメフラシだ！」「先生！この貝の名前は！」あちこちから子供たちの驚きと歓喜の声が響いてきます。これは磯の生物を観察する江之浦海岸の風景です。

小田原市教育研究所では、毎年８回にわたって「自然観察会」を開催しています。これは小学校４年生以上に配布している理科副読本「小田原の自然」をもっと活用してもらいたいという願いからスタートしたもので、１０数年の歴史ある恒例行事となっています。毎回、専門の講師の方から説明をいただきながら、単に自然に親しむだけではなく、郷土の自然に対する興味・関心や探究心を高め、自然を愛する態度を養うことを目的として実施しているもので、年々参加者も増え、内容も充実したものとなっています。

自然体験の少ない子供たちにとって、路傍の草花は単なる「雑草」であり、空き地の小石も河原の石も「石っころ」です。小さな昆虫の触角をじっくり見ることも、鳥の鳴き声に耳を傾けることもなかった、そんな子供たちが動植物の名前や特徴を知り、目の前の石の歴史を知った時、目を輝かせ胸躍らせます。子供たちにとって、年８回の自然観察会は自然が育んだ素敵な「宝物」との出会いの時でもあります。

この自然観察会を通して、小田原の豊かな自然を守り育てていこうと思う市民が一人でも多く育ってくれればと強く願っています

小田原メダカ保存会の方と

磯の生物観察の様子

平成２８年度の自然観察会の内容です。

第１回	４月	平地の自然	あぜ道の花や虫、メダカの観察	富水～桑原
第２回	５月	江之浦海岸	海岸の自然　磯の生物の観察	江之浦海岸
第３回	６月	ツバメの観察会	ツバメの観察・調査	市役所周辺
第４回	６月	酒匂川の自然	河原の岩石　動植物の観察	報徳橋付近
第５回	７月	丘陵の自然	夏の虫の観察	辻村植物園
第６回	１０月	山地の自然	秋の植物の観察	長興山付近
第７回	１２月	小田原の地形	地形地質の調査	弓張の滝
第８回	１月	酒匂川水系の野鳥	冬の野鳥観察	富水～狩川

研究所　新刊図書　紹介

～新しく購入した書籍を紹介します～

1	変わる学校　変わらない学校	6	フォーカス・オン・フォームとＣＬＩＬの英語授業　生徒の主体性を伸ばす授業の提案
2	カリキュラムマネージメントハンドブック	7	教員免許更新制ガイドブック
3	道徳授業が深まる国語教材活用の実践	8	大学生･社会人のための言語技術トレーニング
4	悩ましい国語辞典	9	泣きみそ校長と弁当の日
5	子どもを志望校に合格させる親の習慣 - 8 -		

※書名だけを載せています、詳しくはお問い合わせください。

小田原教育　第 126 号　発行日　平成 29 年 3 月 10 日　　発行者　教育研究所長　柳下　正祐
発行所　小田原市教育研究所　〒250-8555　小田原市荻窪 300 番地　TEL0465-33-1730